

植物の開花と花成について

2019.04.20

花の開花にいたる過程に大きく2つのパターンがあることを知りました。
ある専門家に教えられた知見を今日は紹介したいと思います。開花はなじみ深いものですが、花成という植物学上の術語はあまり知られていないと思うからです。

毎年、春になって桜や菜の花が一齐に咲くのは多くの人にとってなじみの深いことからである。
ソメイヨシノとアブラナは同じような時期に花を咲かせるが、実は花を咲かせるまでの過程はこの2つの植物では大きく異なっている。

ソメイヨシノの場合には、花のもとになるつぼみは前の年の年末には既にほぼ出来上がっている。つぼみのもとの花芽がつくられはじめるのは前の年の夏である。

それに対して、アブラナでは、花芽が作られるのは、年が明けて冬の終わりから春のはじめにかけての時期である。

つまり、花芽をつくりはじめる時期と、実際に花を咲かせる時期が、アブラナの場合には離れていないのに対して、ソメイヨシノの場合には大きく離れている。

わたくしたちが花について考えるときに、普通もっとも重要なイベントだと考えるのは花が咲くことであり、これを「開花」と呼んでいる。開花によって、固く閉じていた顎片や花弁(花びら)が開き、オシベの葯から花粉が放出される。

「開花」と並んで重要なイベントは、花芽をつくりはじめることで、こちらは、植物学上は「花成」と呼ばれる。

アブラナやアサガオの場合のように「花成」と「開花」の間に時間的な隔たりがほとんどない植物では、花成によってつくられはじめた花芽は成長を続けて成熟し、開花にいたる。

一方、ソメイヨシノやチューリップのように「花成」と「開花」の間を長い時間を隔てている植物の場合には、花成によってつくられはじめた花芽は、成長の途中で休眠して冬をすごし、春になってふたたび成長と成熟を再開して開花にいたる。

このように「花成」と「開花」は別の現象であり、二つの言葉を使い分けるほうがわかりやすい。

この花成を促すのが花成ホルモンで、花成に関係する特定の遺伝子から作られるたんぱく質であることが最近になってわかってきた。花成ホルモンは葉で作られ、花芽が形成される茎頂まで運ばれて、そこで花芽形成に関与することが知られるようになった。

(京大生命科学研究所 荒木 崇氏のコラムからの引用)



いろいろな花を眺めながら、この花はどちらに属するのか、思いめぐらしてみるのが一興かと思えます。

以上